SITES II
HERSETEC
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration SITES II
Nagoya University, Graduate School of Letters. Global COE Program

GCOE NEWSLETTER

国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム

テクスト布置の解釈学的研究と教育

2008.6
No.2

CONTENTS

巻頭言　博論は知的越境から／大学院教育の充実と国際化 …… 02
グローバルCOE論文賞 …… 03
大学院生海外派遣事業 …… 04
教育プログラム　2008年度前期講義科目の紹介 …… 06
2007年度後期開講授業要旨 …… 07
研究活動　グローバルCOE国際研究集会 …… 11
オープン・レクチャー …… 12
グローバルCOE研究員ブリーフィング …… 13
海外出張報告 …… 14
名古屋大学グローバルCOEスタッフ紹介 …… 15
Report & Information …… 16

博論は知的越境から

佐藤彰一
Sato Shoichi
● 拠点リーダー

私どものグローバル COE プログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」は2年目に入り、教育研究面はもちろんのこと、組織体制の整備と国際交流の面でも一段と充実してきたことは、同慶の至りと存じます。これもプログラム推進担当者、COE 研究員、リサーチ・アシスタント、コーディネーターや事務スタッフの皆さんのご協力と、このプログラムに寄せる熱意の賜物と感謝申し上げる次第です。

プログラムにとって、教育研究の最初のフル・イヤーでもあり、また中間評価前の締めくくりの年でもあるこの平成20年度は、プログラムの推進にとって非常に重要な節目になる年と考えています。予めのプランにしたがって、新学期からは大学院後期課程の学生のために、前期ゼメスターと後期ゼメスターを合わせて八つの授業を、「テクスト布置解釈学原論」、「テクスト布置解釈学各論」として新設しました。

20にもおよぶ専門分野を専攻する後期課程の学生の皆さんが、これら新設の授業を自分の専門分野を超えて知的越境を実践する好機ととらえて、進んで意欲的に参加することは、それぞれに豊かな実りをもたらすにちがいありません。人文科学に共通する知的営みとしての解釈学的営為は、解釈という行為が思考作用の発現であるかぎり、対象は生身の素材として只そこにあるのではなく、仮想であると同時に現実でもある諸テクスト体の配置構造の中に置かれているのだと考えます。それが解釈学的布置構造なのであり、およそテクストである限り、文学であれ、哲学・思想であれ、歴史であれ、それぞれに分野により差異はあるものの、テクストはひとしく布置構造の諸項の関係性の中に存在していると考えられます。

このような解釈学的な枠組を導きの糸として、それぞれの領域で、学生諸君の清新な眼をもって、そして独自な仕方でテクストに取り組まれ、それが旧来の見方とは異なる新たな解釈学的発見にまで至るよう願ってやみません。

大学院教育の充実と国際化

和田壽弘
Wada Toshihiro
● 名古屋大学文学研究科
研究科長

名古屋大学文学研究科の教員が中心となって推進するグローバル COE プログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」は、昨年度に「英語歴史テクストの文献学的・文法論的研究」「バルザック、フローベル：作品の生成と解釈の問題」「テクスト解釈の中に人間のアイデンティティを探る」というテーマの下に3度の国際研究集会を開催し、着実にその歩みを開始しました。一般の方々をも対象とする「オープンレクチャー」も開講され、教育と研究の成果を大学の外に向かって発信するという工夫もなされています。大学院生の海外派遣や懸賞論文募集の制度も設けられ、プログラムの全貌が具体的な形を伴って次第に公になりつつあります。次々と提示される事業に接するたびに、文学研究科は本プログラムを誇りに思うとともに、是非成功させるべく支援していく必要性を感じています。

本年度より、文学研究科では大学院後期課程の学生を対象に「テクスト布置解釈学原論」「テクスト布置解釈学各論」という講義を開講し、必修化しました。プログラム自体は文字テクストに特化したものですが、研究手法は、これを研究対象とする学生・研究者にとってのみ意味があるというわけでは決してなく、広く人文学を志す者ならば程度の差こそあれ必ず関わる手法であると思われます。この観点から大学院の学生諸君には、自身の研究対象の如何に関わらず、講義を契機として、「解釈」という知的営為を対象化して観るという態度を養って、視点を広げていただきたい。そうすることにより、自身の研究方法に対する反省も生まれ、必ずよい効果をもたらすものと信じています。また、本プログラムのもとで開催される国際研究集会や海外の研究者による講演などは、研究分野に関わらず、学生諸君の方法論上のみならず研究交流上の視野を広げることにも役立つに違いありません。教育研究の国際化が重要視される時代にあって、活躍の場を世界に求めて飛翔していただきたいと願っています。

本プログラムは、人文学の諸分野を統合するという高邁な使命を持つテクスト学をさらに深化させると同時にその射程を拡大し、その成果を大学院教育に反映させることを目的としています。拠点リーダー佐藤彰一教授をはじめとするスタッフの奮励努力、並びにそれを支える文学研究科の教員の協力により、本プログラムの諸事業が滞りなく実施され、研究科が人文学における教育研究の国際的拠点となることを確信しています。

Global COE
グローバルCOE論文賞

文学研究科グローバル COE プログラムでは、博士後期課程に在籍する大学院生の優れた論文を「グローバル COE 論文賞」として顕彰し、プログラムの研究論集『HERSETEC』に掲載します。2007年度の募集は2月22日に締め切られ、多くの応募の中から以下の2名の大学院生の論文が採択されました。2008年度については8月と2月の2回募集する予定です。「グローバル COE 論文賞」に応募するためには、グローバル COE 授業科目「テクスト布置解釈学原論」または「テクスト布置解釈学各論」を受講していることが必要となります。詳しくは Web に掲載するとともに、メーリングリストで発表します。

小久保 嘉紀

日本中世書札礼の成立の契機

【講評】本論文は、鎌倉時代から戦国時代に至る日本中世武家社会の書状儀礼である『書札礼』を対象にして、その歴史的諸相を解明したものである。本論文によれば、鎌倉時代に統一的な書式として規範化された『弘安礼節』（1285年）が公家社会の統一的な書札礼であったのに対して、武家社会ではかかる規範が存在せず、鎌倉・室町時代を通じて各家の有職故実に基づいた個別的な運用が行われていた。論文では、戦国期において各家の『書札礼』が数多く成立したことについて『弘安礼節』と比較することによって、その意義づけを行っている。論文では、『弘安礼節』に現れた公家の書札礼が官位を拠り所として定められているのに対して、武家のそれは現実の支配関係に応じて屈折を加えられながら、究極の基準が源頼朝との「由緒」であったことを明らかにしている。論構成は堅実で資料の考証も手堅く優れた論文であると認められる。特に『弘安礼節』との比較が効果的で官位という古代的合理主義から人的結合に礼節の軸が移行する様相の描き方が説得的である。その移行の意義を中世社会の成立と併せてより深く考察することが出来ればさらなる発展が期待される。

阿部　伸

批判のコンテクスト――エウリピデス『オレステス』におけるアポロン――

【講評】本論文はエウリピデスの劇『オレステス』を対象に、作品に描かれるアポロンに対する批判を検証し、批判的な発話の作品的な価値と歴史的な価値を析出するとともに、エウリピデスの思想的態度をも解明しようとする点で大胆且つ意欲的であるといえる。

「神話から理性へ」という図式では捉えきれない深さがエウリピデスの作品にもあるとの理解から出発し、先行研究を渉猟しつつこうした矛盾をアイロニーという概念を使って説明したり、作品成立時の受容の問題とギリシア文学における口承的で特殊なテクスト生成に帰することはできないと論者は指摘する。その上で、アポロンに対する批判的な発話が、身内間での発話と法廷での発話という作品中の場面設定において異なることを指摘し、そこから法廷での責任と神託とを区別するギリシア的伝統という論点を導入する。しかしそうしたギリシア的伝統こそ、『オレステス』において主人公オレステスが批判の対象としていることを論証し、オレステスによるアポロン批判の発話には、伝統的な価値観とは反対にいかなる場合にも神託が有効な価値を持つとのエウリピデスの主張を結論として導き出している。

論の構成がややもすると明確さに欠ける部分もあり、また特に法廷での発話における神託の扱いについての考察にはより一層の論拠の提示が求められるものの、論者の主張は全体として破綻しておらず、またテクストとしての『オレステス』とその背景にあるギリシア的伝統を対比させる論法は十分説得力を持つといえる。

2007年度 大学院生海外派遣事業 第1回

エチオピア マンジョの文化人類学的研究

エチオピア

吉田早悠里●文学研究科 文化人類学 博士後期課程1年

2008年1月18日から2008年3月15日の約2ヶ月間、エチオピアに滞在し、エチオピア南西部カファ地方に生活する被差別民マンジョが政府に提出した請願書の読解を通して、文字テクストの持つ社会的な意味やこれらが持つ影響・力について口承テクストや身体所作テクストとの相関から明らかにしようと試みた。

首都アディスアベバでの滞在期間中は、アディスアベバ大学にてカファ地方に関する文献調査、マンジョが1997年から2001年にかけて政府機関等に提出した請願書26通、政府によるマンジョへの回答書および報告書7通、マンジョ自身が記述したマンジョの歴史・文化に関する報告書の計3種類92枚のアムハラ語文書の翻訳・読解を行った。読解作業が終了した後、南部諸民族州政府役場、カファ地方役場、シェカ地方イェキ行政地区役場を訪れ、マンジョの請願活動に対する政府の見解およびマンジョに対する政策について聞き取り調査を実施した。また、カファ地方において、請願活動に携わったマンジョに対して請願活動を実施するに至った経緯・背景に関する聞き取り調査を行い、彼らが請願活動の背景として説明する事柄が日常生活においてどのように経験されているのかについても参与観察を行った。

今回の調査から、請願書におけるマンジョの主張、聞き取り調査でのマンジョの主張および請願活動に関する説明、そして請願活動の背景として説明された日常生活におけるマンジョの経験の間にはいくつかの齟齬があることが明らかになった。また、請願書に対する政府の見解も、請願活動当時と現在では変化していることが明らかになった。以上のことから、今後、請願書がエチオピアの社会・政治・経済およびエチオピアに暮らす他の民族にどのようなインパクトを与えたのかについて詳細にすることで、文字テクストが持つ社会的意味・影響・力ついてより動態的にとらえることができると考える。

マルキ・ド・サド『美徳の不幸』生成論的研究

フランス

鈴木球子●文学研究科 フランス文学 博士後期課程1年

18世紀フランスの作家、サド侯爵は、その美徳がゆえに不幸に陥る娘、ジュスティーヌの物語を題名や内容を少しずつ変更し、新たなエピソードを加えながら、繰り返して書き続けている。第一版『美徳の不運』、第二版『ジュスティーヌまたは美徳の不幸』、第三版『新ジュスティーヌ』の三つの版は、よく知られている。

今回の調査(2008年3月9日から3月22日までの、約2週間)では第一版『美徳の不運』以前に執筆された「最初の構想」の草稿版を対象とし、「最初の構想」と第一・二・三版とを比較し、テクストの生成過程を明らかにすることを目的とした。フランス国立図書館で草稿版の読解・大まかな翻訳を行った。その結果、「最初の構想」から第一版への幾つかの変更箇所が明らかになった。また作中人物ブレサック侯爵の挿話に、「最初の構想」にはなかった宗教的な言葉が、版を重ねるうちに書き加えられていく過程に非常に興味を抱いた。

パリ滞在中に、ソルボンヌ大学の18世紀リベルタン文

学のミシェル・ドロン教授にお会いし、その指導を仰ぐことができたのは、大きな収穫であった。サドとフランス革命、宗教との複雑な関係や、「近代性」という言葉の定義の重要性などについて、アドバイスをいただいた。

リヨンでは印刷博物館を訪れた。15世紀以降の印刷機や書物などを実際に見ながら、特にグーテンベルク以後の印刷・出版の歴史について学んだ。また、ここでアシニャ紙幣（フランス革命期に反カトリック政策に伴い、没収された聖職者の財産を担保として発行された不換紙幣）の実物を見ることができたのは、予想外の喜びであった。

いただいた助言を活かし、また今回の調査で得た資料を更に丁寧に読み込んでいくことで、サドのテクストの生成過程や、テクストと宗教との関わりを明らかにしていくことができると思う。

真福寺の歴史テクスト――宗論としての仏教史叙述

イギリス

三好俊徳●文学研究科 比較人文学講座 博士後期課程３年

2008年3月17日にロンドン大学東洋・アフリカ研究学院（SOAS）におけるワークショップ「日本宗教研究：フィールドワークと文書からの新たな発見」に参加し、「Buddhist History as Sectarian Discourse: Historical Manuscripts from the Shinpukuji Archives（邦題：真福寺の歴史テクスト――宗論としての仏教史叙述）」と題して英語による研究発表を行った。

本発表では、名古屋市真福寺大須文庫に所蔵される、史書の形式で行われる仏教史叙述テクスト（それを仏教史書とする）の内容の検討をとおして、中世において仏教史書はどのような意味を持っていたのかを考察した。まず、真福寺に所蔵される仏教史書の紹介と内容の分析を行った。そのうえで、これらの書物がなぜ真福寺に集められたのかという問題を提起し、その理由を仏教史叙述が中世寺院のどのような活動と関わるのかを分析することで考察を行った。ここでは寺院間の抗争と仏教史書との関係を考察し、仏教史叙述という行為は、寺院の自己主張と関係が深いことを指摘した。そのことから、仏教史書というテクストは文庫のなかで、歴史書として単独に価値を持つのではなく、寺院間の相論や法談に関係するテクストと関係するテクストとして価値を持つということを明らかにした。すなわち、中世において仏教史書は、諸テクストとの関係のなかで意味を持つテクストなのである。

その後、質疑応答で多くの質問やアドバイスをもらい、意見交換を行った。中世の特徴的な世界観である三国観などのテクストに内在する中世思想について、テクストが生成されるときの依拠資料との関係について、また、寺院における諸テクストとの関係について議論が行われた。そのことを踏まえて、今回の発表の内容と今後の調査・研究をより深く確実なものにできると考える。

その後、イギリスとアイルランドに現存する宗教テクストについて閲覧や調査を行った。オクスフォード大学ボドリアン図書館においては、日本仏教関係の所蔵資料、特に『釈迦の本地』などの仏教と関係が深い奈良絵本や明治期の仏教学者南条文雄の直筆資料を閲覧し、日本館館長のイズミ・タイトラー氏と意見交換を行った。ダブリンのチェスタービーティ・ライブラリィでは所蔵される奈良絵本を閲覧するとともに、「奈良絵本・絵巻国際会議」に参加した。特に、テクスト収集の過程や海外における日本関係資料研究の現状について興味深く伺った。これは、在海外テクストを実見できる機会であったとともに、テクスト収集および受容について、海外における日本関係テクスト収集から考えることができる機会となった。

2008年度前期 講義科目の紹介

グローバルCOEプログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」では、大学院生がグローバルCOEプログラムの枠組みの中で研究対象としている学問分野での読解技術と解釈技法を修得することで、個人の研究能力を向上することができるよう、大学院博士後期課程の学生を対象に一連の「テクスト布置解釈学」を開講しています。2007年度は「テクスト布置解釈学概論」のみが開講されましたが、2008年度からは、「テクスト布置解釈学原論」に加えて個別のテクスト領域を対象とする6つの授業を「テクスト布置解釈学各論Ⅰ～Ⅵ」として開講します。各授業はグローバルCOEプログラムの事業推進担当者が複数で担当し、「テクスト布置解釈学」の視点からそれぞれの学問分野を対象にした講義が行われます。

テクスト布置解釈学原論

本講義はグローバルCOEプログラムにおいて研究と教育を推進している教員が、それぞれの立場から「テクスト」を対象にした研究について講義するものである。講義は、各教員が2回以上担当するため、通常の15回の開講ではなく30回以上、曜日や時限も不定期に開催される。単位を取得のためには、実施される講義の中から15回の授業に出席することが必要となる。
各講義は、グローバルCOEプログラムの研究において中核を成している「テクスト」と「解釈学」のテーマを中心に授業担当者が自らの研究対象について講義するものである。

テクスト布置解釈学各論

各論Ⅰ

テーマは「封建制概念の脱構築」である。毎回講義形式で行なう。「封建制」という概念は歴史学だけでなく、社会一般でもしばしば用いられる概念であるが、この言葉は過去の歴史的事象だけでなく、現在の様々な事態を表現するためにも用いられている。いわゆる「構成主義」あるいは「構築主義」と呼ばれる学問的主張があるが、「封建制」は「構成主義」の典型例である。授業では主に歴史学の立場から、「封建制」概念の構築性を解釈学的に解明し、この概念を用いることにより逆に「隠蔽」されたものが何であったかを解き明かす作業をおこなう。

各論Ⅱ

文学テクストの写本・版本・活字印刷といった差異や、書物の形態とその内容との関連、また、絵巻や絵入り本についても対象とする。
鎌田は「テクストの形態と内容――パラテクストを読む」とし、ジェラール・ジュネットの『スイユ』を理論的典拠としつつ、パラテクスト（序文的言説、題名、作者名、支持体など）の多様な現れとその機能の問題に特化する予定である。文学テクストが読まれるにあたっては、それがいかなる媒体に載せられ、いかなるフォーマットで届けられ、いかなる構成を取っているかが読解を方向付けること、また反対に、どのような形態で受容されるかが作者の制作の挙措に大きな影響を与えていくことを、フランスおよび日本の近代文学の事例を取り上げ、資料に即しながら検討していく。
阿部は日本中世文学と宗教・思想史の立場から、テクスト研究の実践例を中心にして論じる。
高橋は平安朝を中心とした日本古典文学研究の立場から、テクスト理論と絵画による享受を含めた研究の具体例について論じる。

各論Ⅲ

言語テクストに関する解釈学的な手法を一般言語学（ロマンス諸語と日本語を含むことがある）、英語学、日本語学からの実践報告を通じて講義する。一般言語学からは、町田健が、英語学からは天野政千代が、日本語学からは、釘貫亨がそれぞれの立場から、言語テクストの多様性、研究対象の学理規定を講ずる。併せて「テクスト布置」のとらえ方によってどのようなことが明らかにされたか、またどのようなことが明らかになると期待されるかに関する展望を明らかにしたい。講義は三者のリレー形式で行う（順序は未定）。併せて、近現代の言語学史に関する知識を講ずる。

各論Ⅳ

百科全書の「自然法」、「政治的権威」等の読解という形をとりつつ、これらのテクストが置かれたコンテクストを多面的に考察することにより、18世紀フランスの現実理解を試みる。うまくいくと、21世紀日本という解釈者の現実も違って見えてくるはず。15講それぞれ「百科全書はなぜ編まれたか？」、「啓蒙とは何か？」、「楽観主義とは何か？」など、特定の問いを取り上げ、講義の上、クラスで議論する。18世紀フランスの思想状況、公共性・法・解釈の基礎的考察、百科全書テクストの読解、アダム・スミスの公共哲学、拓かれる公共性と解釈の順で考察する。

各論Ⅵ

学問の学際化と国際化の中にあって、自らの研究内容を外国語で発信する能力の育成はどの分野においても非常に重要な課題となっている。この授業では受講生がそれぞれ研究発表を外国語で準備し、授業で実際に口頭発表を行う。質疑応答も外国語で行う。英語が中心になるが、フランス人講師によるフランス語の研究発表の訓練も予定しているので、受講生はどの言語を選択するのか最初の授業で申し出ること。

2007年度後期開講授業要旨

第4回 ● 10月24日㈬

思想史研究とマニュスクリプト―スコットランド哲学研究をもとにして

長尾伸一教授（経済学史）

本講義では18世紀スコットランドの哲学者トマス・リードを取り上げ、コンテクスト主義や言語行為論の観点を踏まえて、18世紀のマニュスクリプトを言説として考察した。

いまだ高価で、多くの「学術的」な著作は予約購読の形で流通したとはいえ、書物はもっとも広い受け手に向かって発信された公的言説だった。それに加えて大学での講義もまた、教師の見解を伝える一種の「出版」と見ることができる。講義を聴いたり講義ノートを読むことは、高等教育を受けることができた少数の人々の特権だった。リードの「ユートピア論文」のような手書き原稿は、さらに限定された受け手に対して著者の思想や意見を伝達する手段だった。科学者集団が普遍的に制度化されるのは次の世紀であり、この時代でも科学者たちはいまだに「学術的書簡」によって意見交換を続けていた。書簡はまた社会的、政治的に問題のある学問的主題を仲間内だけで論じるための安全な方法であり、数学者たちでさえそのような危惧を持つことがあった。

特権的な少数者のために製作され、流通したとはいえ、以下のような理由で、これらはすべて「公的言説」とみなすことができる。それらの言説が発話され、書かれ、伝達された空間は親族や友人たちで構成される「親密圏」ではなかった。これらの言説がその内部に存在した空間を構成する団体やネットワークへの参加者たちは、文芸や科学研究や政策形成のような、何か重要な、何か社会にとって有益な、言い換えれば何か「公的」な活動に自分たちがかかわっていると考えていた。その空間の中では彼らは私人ではなく、一種の「公人」として振舞っていたのである。

このように18世紀のマニュスクリプトを言説として研究することは、それらの資料の内容だけでなく、同じ著者による印刷物の性質にも光を当てることになる。以上の議論は18世紀の言説の多様性を明らかにするので、当然「書物とは何か」、あるいは「書物」を書くという行為の意味と意図とは何かということが次に問われるからである。テクストは自らの創造者の期待や戦略とは関係なく、それ自身の物語を語り出していく。しかしそれはまた言語行為の産物でもある。何かを「書く」という行為の最初には、それを始動させる誰かの欲望がある。要するに、「古典」と呼ばれる膨大な紙片の集積の背後には人間存在が立っている。18世紀のテクストを言説としてとらえることは、テクスト性とともにコンテクストも無視できないことを想起させる。そしてこの両者の結びつきの探求は、歴史学と思想史と批評理論の思いがけない出会いを準備する。政治言説史の方法に関するJ.G.A. ポーコックの表現をパラフレーズするとすれば、それが可能なことこそが、18世紀ブリテンに代表される初期近代の西欧社会の一つの特徴を指し示しているのである。

第6回 ● 2007年11月7日㈬

日本人と漢字

釘貫 亨教授（日本語学）

慶応2年（1866）、徳川幕府の官僚である前島密が将軍徳川慶喜に建白した「漢字御廃止之儀」は、極めてラジカルな国字改革として知られる。この改革案が結果的に実現しなかった原因は、様々に考えられるが、その大きな要因として、当時の庶民の漢字を巡るリテラシーの高さが障害となったことは確実である。幕府や各藩が百姓、町人の教育に責任を持ったことはないが、寺子屋などの民間の教育機関が庶民教育を担った。本来、支配者の専有物であった文字とりわけ漢字の民衆への下降は、鎌倉時代に仏教僧侶を媒介にして始まり、近世期には

大衆的出版物が漢字情報を民衆に普及する役割を果たした。当時の大衆的な読み物に使われる漢字には、出版書肆の配慮で音訓にわたる極めて懇切な振り仮名が施されており、これが教育的効果を持ったことが容易に想像される。近世期には商業活動や農業経営において文書決裁が常態化しており、これに従事する農民や商人にとって文字処理能力は必須の要諦であった。寺子屋の普及は、このような社会的要求に応えたものであった。幕末には、人力車夫や大家に奉公する少女が労働の合間に書物を読みふける光景が複数の西洋の外交官によって驚きを以て報告されており、幕末当時の日本の書記生活は、漢字なしに成り立たなくなっていた。漢字は日本人にとって難解な外国文字であるが、長年にわたる学習の結果、抽象的概念をこれによって表示する習慣が身についており、明治維新以後の近代化過程の中で西洋の制度、思想、技術にかかるあらゆる概念を漢語訳によって乗り切ったことは、世界の近代化過程の中で特筆すべき出来事である。

第8回●2007年11月21日㈬

生活深度とテクスト解釈の動態性

和崎春日 教授（比較人文学）

「テクストを読み取ること」を、時間軸をいれて「読み取れる意味の変化」として捉えていく動態的な意味の読み取り方法論を提案する。まず、日本で社会化・文化化された私が、そこの価値基準を知らないアフリカを初めて訪れ、徐々にその生活様式に慣れていく変化を、「テクスト動態」として取り扱う。こうテーマを設定することによって、刻々と変わっていくテクスト間の布置関係が動態的に把握できるからである。

異文化に住み始めた文化人類学者は、初めのうち、自分が慣れ親しんだコンテクスト―テクスト関係による意味の読み取りを試みるしかない。そこのコンテクストもテクストもまったくわからない。言葉の一つ一つを獲得していき、ある物ある事の意味を教わると、生活事象全般の意味が一つ一つ明らかになっていき、自分が知りたい事象の意味（たとえばある儀礼の意味）の一端が見えてくる。この間、何回もの読み間違いと齟齬と誤解（相互の）とタブー侵犯をおこなう。周りの事象の意味が一つずつわかると、ある対象とする特定事象の意味も段階的にわかってくる。その事象が見えてくると、周りの意味も以前とはまったく違うものに見えてくる。これを、何度も何度も、毎日毎日繰り返す。

こうして、単なる静態的なテクスト変換の布置ではなく、このように時間軸をいれて刻々とフェーズを変える「複数テクスト遷移モデル」が人々の行為や物事の「読み取り」には、枢要であることを提案する。しかも、このモデルは、コンテクストとテクストの地位逆転可能性を包摂したモデルである。つまり、生活にある物事の意味は、主役になって注目され意味を読み取られるが、逆にそれが脇役になって他の事象の意味を規定する。こうして、「コンテクスト―テクストの相互変換性」を包摂した「複数テクスト遷移モデル」の有効性を提案したのである。

第9回●2007年11月28日㈬

テクストにおけるアイデンティティ――時間性・物質性・空間性――

重見晋也 准教授（電子テクスト学）

近代以降特に文学テクストにおいては作者にテクストを帰属させ、活版印刷以来の大量生産技術を用いて同一のテクストを大量に流通させることで、テクストの同一性を保ってきた。しかし、ロラン・バルトが「作者の死」を宣言すると、聖ヒエロニムス以来堅持されてきたテクストを作者に帰属させるという考え方が大きく揺らぐことになった。すなわち、テクストの価値・整合性・文体的均一性・時間的整合性という4つの基準はもはや無用のものと考えられるようになったのである。本来テクストは同一のテクストであれ異なるテクストであれ、その価値や形式は時代やメディアにあわせて変化していくものである。そうであれば、デジタル・テクストの時代を迎えてテクストがどのようにして自らの同一性を確保しうるのかを考えることは、テクスト概念の現在を考えることに他ならない。デジタル・テクストの例としてハイパーテクストを実装したWebを対象に考えると、テク

ストとしての Web は空間性、物質性、時間性の3つの点で自己同一性を実現していることが分かる。デジタル・テクストにおける自己同一性の実現は、フーコーが『知の考古学』で述べた、言表が言説を構成する際に相関する3つの領域に一致している。

第10回 ● 2007年12月5日㈬

ライプニッツとディドロにおける記号論の問題

クレール・フォヴェルグ 外国人教師（フランス文学）

17世紀と18世紀にロックやライプニッツやディドロなどの著作者によって定義されてきた記号論は、言語記号以前の記号の概念に属し、その様々な特徴は参照するに値する。と言うのも、記号論の問題は解釈の観念に関係するからだ。ライプニッツによると、記号論は人間の持っている秩序と技術の認識と発明の能力に係わり、外界に意味を与える能力に係わるものである。

ところで、我々は外界の秩序は直ちに感知できず、現象の理解は現れてくる現象に我々が与える秩序、つまり知覚が与える秩序に依拠している。従って、知覚は記号論にモデルを提供することになる。と言うのも、知覚そのものは感性で捉えうる性質と抽象的な概念を混合しているからである。この点においては、他の点で意を異にする著者であるライプニッツとディドロが一致を見る。どの感覚器官にもタブラ (tabula、ラテン語) が備わっており、そのタブラによって諸感覚と言語以前の記号を組み合わせられるのだ。

かくして記号論は、当初同一視されていた論理学とは区別され、ライプニッツによって発明の技術として定義されて、更に『百科全書』の計画において最適な応用がなされる。なぜなら、18世紀にディドロとダランベールが編集した『百科全書』は、発明と発見の偶然的な秩序に従って科学と技術の歴史を記述するだけでなく、むしろ記録される様々な知識の秩序自体が発明の方法を示すように企図しているからだ。言い換えれば、発明の技術を知るには発見の歴史は役に立たないのであって、結局、実際に科学的であり、百科全書に適切な秩序を定めるためには記号論が必要になる。なぜなら、百科全書派が構想した記号論は、現象の秩序と知覚の秩序の関係が、自明ではなく絶えず確証される必要のある複数の類似に基づいた関係であると認識させてくれるからである。

第11回 ● 2007年12月12日㈬

物語テクストの絵と歌について

高橋 亨 教授（日本文学）

『源氏物語』や『狭衣物語』などの平安朝の物語作品においては、その生成の過程から絵や歌との密接な関係がある。画中に複数の場面をもつ屏風絵においては、そこに画中の人物に同化した内部の視点から、また、その場面を外部の視点から対象化した屏風歌が詠まれている。それらを連続的に結合すれば、歌を伴った物語が生まれる。あるいは、歌絵とよばれるような小画面の紙絵においては、それらを複数組み合わせて配列することによって、やはり歌を伴った物語が生成する。そうした文献記録はあるが、平安朝中期までの実作品は、ほとんど現存していない。

現存するのは、徳川・五島本の『源氏物語絵巻』など、平安朝後期から江戸期に至る「源氏絵」などの物語絵であり、それらは文字テクストの享受によるものである。その享受においては、歌や詞書を伴わない絵のみの絵画化や、絵を伴わない歌のみを採録したテクストも生成している。

本講義においては、こうした平安朝物語における絵と歌と物語テクストとの関連について概括するとともに、『源氏物語』と『狭衣物語』の絵画資料を具体例として、その歌との関わりについて考察した。特に、『狭衣物語』の絵画資料に関しては、従来は鎌倉時代の絵巻断簡と承応版本の挿絵のほかは、ほとんどその存在が知られていなかった。それら『狭衣物語』の現存絵画資料を紹介し、それに基づいたテクスト論の可能性を探った。

第12回 ● 2007年12月19日㈬

Modalityの表現法

天野政千代 教授（英語学）

発話の内容である命題 (proposition) に対する話し手や書き手の心的態度を法性 (modality) と言い、直説法、仮定法、命令法のように法性を表すために特殊化された動詞の屈折語尾形態を法 (mood) と言う。言語では法性は法によってのみ表されるのではなく、法助動詞、準法助動詞、法副詞、挿入節などいくつかの語彙的手段によっても表される。しかし、現代英語の will, may, shall, must 等の方助動詞は語彙的項目というよりは、法性を表すために特殊化された項目であり、機能的項目と一般に見なされている。法性を表現するために特殊化された屈折語尾形態や機能的項目の存在は早くから文法家の関心を集め、様々な研究がなされてきた。

絵画のような非言語テクストも描かれた対象に対する画家の心的態度を表すことは言うまでもなく、特に人物や生き物の目と法性との強い関係が体系・機能文法の研究者によって近年指摘されている。法性は目のみによって表されるのではなく、色彩、構図、被書体の大きさなどによっても表されるが、目は法性を表現するために特殊化された器官と言うことができるであろう。今回の授業では、北信濃の小布施市にある岩松院の本堂天井に葛飾北斎によって描かれた鳳凰図を取り上げ、この絵の法性について論じた。鳳凰が架空の生き物であるという事実が、法性を強める結果になっていることを見逃してはならないが、その八方睨みの目として知られる目と法性の強い関係は特に注目に値する。この目の異様な鋭さは法性そのものであり、見る者に特殊な印象を与えるため、すでに言語の法に対応するものと言うことができる。

第13回 ● 2008年1月23日㈬

パラテクストの機能

鎌田隆行 講師（フランス文学）

ジェラール・ジュネットがその浩瀚な『スイユ』で詳述したように、近代以降、文学作品が流通し、受容されるにあたっては作者名、題名、序文、献辞、挿絵、解説などといった種々のパラテクスト（副次的テクスト）が付されるのが通例であり、それらは読者による本文の読解に大きな影響を与える。

パラテクストは作者と読者の関係を反映する戦略的な場となるゆえに、文学作品の制作や受容の様態を考える際に極めて重要な要素となる。例えば序文的言説の多くは 1) 作品の価値の正当化、2) 読解の方向付けの機能を担うものであり、その文学ジャンルとしてのステイタスが依然として曖昧であった十九世紀前半のフランス小説の場合であれば（当時の「高貴な」ジャンルはあくまでも詩や演劇であった）、受容への不安を反映して、作品の虚構的性格を隠蔽する真実性の強調（「発見された草稿」のトポスがその代表例）や起こりうる批判（内容が不道徳的だとする批判など）に対して予防線を張る言説が頻繁に見られる。「読者への言葉」と題されたスタンダール『パルムの僧院』の序文などはその好例である。また、献辞文の場合は発話行為的に見るならば作者が献呈先の相手に宛てたメッセージであるが、実際には対読者戦略として上記のごとき機能を間接的に担うことも多い。

他方、メインのテクストであるはずの本文とパラテクストの関係が転倒してしまう現象も存在することに注意したい。例えばテオフィル・ゴーチエの『モーパン嬢』は、今日では「芸術のための芸術」のマニフェストである長大な序文がもっぱら読まれ、引用される（本文化している）のに対して、小説の本文が読まれるのは稀であり、序文に対する副次的存在としてパラテクスト化していると言える。読まれうるテクスト群を固定的な関係ではなく、布置として捉える必要性がこのことから改めて確認できよう。

グローバル COE 国際研究集会

GCOE 第3回 国際研究集会

テクスト解釈の中に人間のアイデンティティを探る

“Identity in Text Interpretation and Everyday Life”

2008年2月9日土－10日日
名古屋大学文学部 文学研究科237室

相互作用と社会構造の間の関係が少なくとも50年にわたって社会理論家の関心を集めてきた一方で、社会を指向する言語学者も近年そのような繋がりを特に活発に探求してきている。このような問題を追及する一般的動機は、しばしば我々の日々の生活の一部を成す問題を理解しようとすることに関係している。この国際研究集会が焦点を置くのは、我々の日々の暮らしの一側面、即ち自己同一性を社会的・文化的・言語的相違として扱い生み出すテクストの状況に応じた解釈である。その中で、このようなテクストの状況内での創出と解釈――非常に大まかに言えば、それらのテクストの音声的・書記的・聴覚的・視覚的組み合わせと定義される――が如何に社会歴史的テクストとより局所的に作り出されたテクストの両方に依拠しているかの探求を試みることであった。

この国際研究集会では、『テクスト解釈の中に人間のアイデンティティを探る』をテーマとし、海外から Dr. Michael O’Toole (Murdoch University)、Dr. Kay O’Halloran (National University of Singapore)、Dr. Shigeru Miyagawa (Massachusetts Institute of Technology) をはじめとする先駆的研究者を迎え、国内から8件、海外から4件の研究発表が行われた。映像やインターネット、音声ファイル等を駆使した発表を含め、我々の日々の暮らしの中にあるテクストと状況に応じた解釈についての研究には、国内外から多くの参加者が集まり、熱心な議論が展開された。

GCOE 第4回 国際研究集会

日本における宗教テクストの諸位相と統辞法

2008年7月19日土－21日祝
名古屋大学文系総合館 7F カンファレンスホール

日本の豊穣な宗教世界を、テクスト学の視点からその体系と構造を対象として、通時的な方法論も含みながら、分野横断的にその多様な位相を解析し、それらを貫く普遍的な統辞法を析出することを基本テーマとして第4会国際研究集会を次の日程で開催いたします。グローバルかつ比較文化的視点で、日本の宗教全般に関して深い学識と研究実績を有し、かつ国際的な研究ネットワークを形成している第一線の研究者として、海外からはイギリス・ロンドン大学日本宗教研究センター所長のルチア・ドルチェ教授とフランス・ソルボンヌ高等研究院・宗教学部のジャン=ノエル・ロベール教授を招きます。また、若手研究者の発表を奨励するために、報告者を世界的に公募した結果、今回8名の若手研究者がこの機会に研究報告を行う予定になっています。

日程

■ 7月18日金	12:00～	プレ・カンファレンス
■ 7月19日土	9:00～12:30	第1部会 ● 古代・中世仏教と目録学
	13:30～18:00	第2部会 ● 日本密教のテクスト世界
■ 7月20日日	9:00～12:00	第3部会 ● 日本宗教と儀礼テクスト
	14:30～18:30	第4部会 ● 宗教テクストとしての和歌
■ 7月21日月祝	9:00～12:00	第5部会 ● 神道というテクストの世界
	13:00～15:30	第6部会 ● 宗教図像テクストの世界

発表者などの詳細については Web で随時更新していますのでご確認ください。

オープン・レクチャー

研究成果を社会に広く還元することを目的として、名古屋大学文学研究科グローバルCOEプログラムでは21世紀COEプログラムに引き続き「オープン・レクチャー」と題する公開講座を開催しています。毎月1回水曜日の18時から、グローバルCOEが名古屋国際センタービルの15階に開設しているグローバルCOEオフィスで、「テクスト布置解釈学」に関連するテーマでの講演を、事業推進担当者の先生やその他の先生がレクチャーします。参加は自由です。毎回の題目などはWebサイトでお知らせしています。本号では2008年1月から開催した3回の要旨を紹介します。

第4回 文字瓦と知識

2008年1月16日(水) 18時—19時

古尾谷知浩 准教授（名古屋大学大学院文学研究科・日本史学）

古代の遺跡で出土する瓦の中には、焼成前に篦などで文字を書いたものがある。この文字は、生産段階でしか記せないもので、手工業生産にどのように人間が関わったのかを示す資料である。人名を記した文字瓦の中には、東国国分寺出土文字瓦に典型的に見られるような、郡名刻印の如き律令制的行政単位名を伴うものと、大阪府堺市の大野寺土塔出土文字瓦に典型的に見られるような、個人名のみのものがある。従来、前者は律令国家主導で建設された国分寺が律令制的負担体系に基づいて造営されたことを示しているとされ、後者は、行基が発願した土塔が個人の知識によって造営されたことを示すものと考えられてきた。しかし、現在、国分寺文字瓦も知識を示しているとの説が出されている。一方、土塔関連の文字瓦の中にも、土塔が所在する大野郡の隣郡にあたる和泉郡に属する池田里の銘を持つ資料がある。これは、別郡に属する人物をことさらに区別するために記したものと推定できる。逆に行政機構名を伴わない資料は大野郡であることを示していると考えられ、いずれも郡の枠組みを意識した記載と評価できる。つまり、行基の知識集団の単位は律令的行政機構の枠組みを利用しているのである。

第5回 ENGAGING WITH PAINTING Botticelli-Canaletto-Rembrandt-Seurat

2008年2月20日(水) 18時—19時

ローレンス・マイケル・オトゥール 博士（マードック大学（オーストラリア）名誉教授）

この講演では、ハリデーの体系・機能文法に端を発する記号論的分析を用いて絵画の構造分析を、いくつかの作品を実例として実際に行った。絵画分析のために用いられる機能は、描写対象を示す表示機能（representational function）、見る者を魅了する引き付け機能（engagement function）、構図を表す構成機能（compositional function）の三つである。この三つの機能を具体的に考察するために、それぞれの機能を顕著に示している作品として、カナレット、レンブラント、スーラの代表的な作品をそれぞれ取り上げ、上記の機能を検証しながら絵画の分析を試みた。しかし、絵画はこれら三つの機能のどれか一つだけから成り立っているわけではない。どの絵画にもこれらの三つの機能を読み取ることは可能である。そこで、三つの機能全てを効果的に活用している具体的な作品としてボッティチェリの『春』を取り上げて考察し、作品における各機能を検証した。また、言語テクストの場合と同様に、絵画のような非言語テクストにも、それを構成する大から小に至る階層的な単位（unit）があり、その意味でも絵画を一種のテクストと見なす妥当性が示された。

第6回 アテネ国立考古学博物館にみるギリシア神話

2008年3月19日(水) 18時—19時

小川正廣 教授（名古屋大学大学院文学研究科・西洋古典学）

ギリシア神話の古典テクストは、紀元前8世紀のホメロスの叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』を嚆矢とし、その後ローマ時代にいたるまで繰り返し再創造されたが、神々や英雄などについての主要な要素は、すでにホメロスにおいて形成されていた。このレクチャーでは、ホメロスのテクストを歴史的コンテクストの中にどのようにして布置することができるのか、主にアテネ国立考古学博物館の考古・美術資料を見ながら考えてみる。

まず、トロイア戦争の神話的題材そのものは、今日明らかにされたミュケナイ文明の様相と重なり合うことがわかる。一方、テクストの歴史的生成については、文字に関する考古資料などからは十分解明できない。それは、ホメロスのテクストが無文字文化を背景とする口誦詩の伝統にもとづいて成立したためである。最後に、現存のホメロスの文字テクストの中から、どのようにして無文字文化の創作プロセスを読み取ることができるのかを探る。

グローバル COE 研究員 ブリーフィング ①

グローバル COE ポスト・ドクトラルの研究員は、個別の専門領域で扱っている研究対象をテクスト布置解釈学の枠組みで捉え直すべく、名古屋国際センターのグローバル COE オフィスを中心に研究活動を行っています。研究員たちの研究成果は「研究員ブリーフィング」と呼ばれる事業推進担当者と研究員が集う場で議論され、研究論文へと結実していきます。

小林 智 ● 日本近代秩序の解明に向けて──自由・法規範・権力行使

近代的自由とは、無束縛・無権力状態での放縦を意味するものではない。それは、M・フーコーが近代秩序の象徴として見出したパノプティコンの構造からも読み取れる。そこでは、他者を前に規範解釈を行う主体が形成される。このとき、自律＝自由とは、主体が自らの規範解釈の妥当性を他者に訴えつつ、それに基づき行為することを意味する。当該秩序では、当該主体が法的権利実現の手段として国家権力を使いこなす態度と実践が要請されるであろう。

さて、周知のとおり、日本では明治期に西洋近代的諸制度が導入されたが、上記の観点から、近代的主体形成がなされたか否かが問題となる。この点、「教育勅語」に象徴される公民教育からは、一般人民による近代秩序原理の理解を妨げる政策が看取される。わが国では、こうして法的権利を主張する主体の形成を妨げる一方、制度運用を担うエリートを養成するという、いわば二重の主体形成戦略が採られたように思われる。

西村善矢 ● モンテ・アミアータ修道院の証人・同意人副署について──中世初期イタリア証書の生成論に関する予備的考察──

中世イタリアを代表する文字テクストの一つに、土地財産の売買や贈与、貸借などにさいして作成された証書がある。公証人制度成立以前の中世初期証書にみられる特徴の一つは、書き手である書記（ノタリウス）以外の人物が文書作成にに関与した点にある。つまり、文書作成を書記に依頼し、また法行為の主体としての役割を演ずる契約当事者も、本文において書記とならんで一人称で登場するばかりでなく、羊皮紙の下部に副署する証人や同意人を自ら選択する立場にあったのである。

以上の点をふまえて、まず私は中部イタリアのモンテ・アミアータ修道院に伝来する8・9世紀の文書を素材として、証書の生成過程、ならびに証書のテクスト布置を仮説的に再構成した。その上で、とくに証人や同意人の選択方式に注目することにより、契約当事者が証書の生成に及ぼした影響に関する予備的考察を行った。

品川大輔 ● シェン（Bantu G40E）の言語構造的特性の記述──グランドデザインとしてのテクスト学的枠組みにおける位置づけ

本ブリーフィングでは、ケニアの首都ナイロビにおいて遅くとも1970年代からその使用が認められ、現在広範に話者を獲得している広義の混合言語（mixed language）コードであるシェン（Sheng）を対象とした研究について、テクスト解釈学的な視点からの全体的な枠組みを提示し、その射程内での同コードの構造記述研究が占める位置づけを明示することを第一の目的とした。また、進行中の研究課題の紹介として、シェンの形態統語論レベルでのトピック、とくにその関係節（relative clause）表示に見られる形式的制約（structural constraint）の問題を取り上げて、概略的に論じた。混合言語一般の成立過程においては、その文法的規則の簡略化（simplification）、語構造の孤立／分析化（isolation/ analyzation）の2つのプロセスの重要性が従来指摘されている。しかしながら、いくつかのシェンの書記テクストをデータとした分析からは、そのバイアスからは逸脱するような現象を見出すことができる。ごく簡単な例を示せば、内陸スワヒリ語における関係節表示の最も分析的な（analytic）方法（スワヒリ語学で言う“amba-(AG)” relative）は対象としたテクスト内では一例も現れず、代替的に“(AG)-enye”（～を持った）という所有関係詞の純粋関係詞としての使用が顕著であるという現象が認められる。こういった現象から、単なる簡略化、分析化という一般的傾向を制約する力としての「構造的パターン（prefix-stem 構造）の維持（或いは広義の structural leveling）」というベクトルが、むしろ優先的に作用していることを示唆する。以上のような視点、さらには現地民族語からの文法レベルの影響を重視しつつ、細部にわたる構造記述を積み重ねていくことで、シェンが有する / ことになるであろう形式的混質性（hybridity）の解明を試みる。

海外出張報告

第83回アメリカ中世学会年次大会──カナダ／バンクーバー

佐藤彰一

カナダのバンクーバーで開催された第83回アメリカ中世学会年次大会（the Annual Meeting of The Medieval Academy of America）に出席するために、4月2日から7日まで出張旅行を行なった。この会議は同時に第42回太平洋中世学会（the Medieval Assoication of the Pacific）も兼ねていて、バンクーバーが州都であるカナダのブリティシュ・コロンビア州の中世研究者と、全米の中世研究者、それにフランス、イギリス、ドイツから参加した中世学者を含め、3～400人ほどの規模の集会であった。この数を多いと見るか、あるいは意外に少ないと見るかは別にして、日本の場合とは異なり、中世を専門にしている歴史家だけでなく、文学、思想・哲学、美術など多様な領域の専門家を糾合し、総合的な中世学を指向しているのがアメリカの中世研究の伝統的な特徴である。

会期は3日から5日までの3日間で、会場に充てられたのはウォーター・フロントに近いダウンタウンにあるハイアット・リージェンシー・ホテルの2階と4階と34階合わせて10ホールで、3日間で46のセッションが開催され、約140の報告とこれをめぐる質疑が交わされた。

オープニング・アドレスは、英国から招待されたオクスフォード大学トリニティ・カレッジ、チーチェル講座教授のクリス・ウィッカム氏が「The Culture of the Public : Assembly Politics and the Feudal Revolution」と題して行なった。これは学問的にもまたパフォーマンスとしても、満座の聴衆を唸らせる見事な講演で、さすが目下世界の西洋中世史家ではナンバーワンの世評を得ている同氏の名声もなるほどと思わせる出来栄えであった。

46のセッションの中には聖人伝テクストの「本歌取り」ともいうべき現象を主題にした「テクストの略奪。聖人伝テクストの構築における古いテクスト影響」や「中世の語り。テクストとイメージ」、「中世の文字テクストにおける本文の余白の相互作用」、「法か、それとも文学か。アングロ・サクソン法史料とそのコンテクスト」など、われわれの研究教育テーマと密接に繋がる分科会があり、多くの興味深い報告が聞けたが、ここで詳しく紹介するスペースがないのは残念である。

ハイアット横の脇道は桜の並木であるが、私が到着したときすでに満開で、道行く人々は携帯電話のカメラで美しい薄桃色の爛漫のさまを写していたが、帰路空港に向うべくホテルを後にしたときも、その漲る容色の力にはまだ聊かの衰えも感じられなかった。

GIRB運営会議への参加とバルザック『セザール・ビロトー』の作品生成資料の調査

鎌田隆行

2008年3月11日―24日（帰国日は翌25日）にフランス・パリに滞在し、本プロジェクトに関連するバルザックの作品生成論について以下の研究・教育活動を行なった。

執行部会メンバーをつとめている国際バルザック研究会（Groupe International de Recherches Balzaciennes）の運営会議（3月22日、パリ第7大学グラン・ムーラン校舎）に出席し、同研究会代表ニコル・モゼ氏（パリ第7大学名誉教授）の司会のもと、日本バルザック研究会の活動の近況を報告するとともに、2010年に開催予定のバルザック作品生成論に関する国際シンポジウムのプログラムおよび運営方法について他のメンバーと討議を行い、特に日仏の若手研究者の参加について意見交換を行った。

オランダ領東インドに於ける民族性と植民地法制との関連付け

ゴーベル・ゼーン

まずは、先日の調査旅行に財政的援助を与えてくれたグローバル COE プログラムに感謝したい。この調査では、オーストラリア、タウンズヴィルのジェイムズ・クック大学名誉教授で、インドネシア研究者であるバーンズ博士の元を訪れた。調査旅行の間、ピーター・バーンズ博士とは、植民地時代のインドネシアに於ける adat「習慣」というテーマと、それと民族性の構築との関係について議論を交わしたが、その中で、バーンズ博士は植民地法制のオランダの大学教授とインドネシア内に於ける民族集団の想定との関係を明らかにすることに成功した。特に、バーンズ博士が指摘したのは、20世紀初頭のライデン大学教授ファン・フォレンフォーフェンが、論争と当時のオランダ領東インド(現インドネシア）に於ける民族集団の概念の強化に寄与した adat 法の最終的な形成の中で如何に際立っていたかである。勿論、そこでの議論からは数多くの更なる疑問が生じたが、それらについては、このテーマについての共著論文のための考えを整理する予定の次回の訪問時に是非とも追及したい。議論と思索のための非常に生産的な時間であったことに加え、自著の第2章を書き終えたことも付言しておくべきであろう。またその間、HERSETEC に於いて出版予定の論文の幾つかと、オランダに本拠を持つ雑誌 Bijdragen tot de Tall, Land- en Volkenkunde（東南アジア・オセアニア人文学・社会科学会報）, 164（1）：69-101に掲載されたばかりの論文 “Language, Class and Ethnicity in Indonesia（インドネシアの言語・階層・民族性）” の校正を行った。

（2008年2月26日～2008年3月25日）

マルタの巨石神殿とホメロスの神話テクスト

小川正廣

2008年3月21日から3月31日の旅程でマルタ共和国を訪問し、古代地中海文化の基層的研究のための調査を行なった。マルタはシチリア島とアフリカ大陸の間に浮かぶマルタ本島とゴゾ島からなる地中海南端の小国だが、世界的に比類のない先史時代の巨大神殿遺跡が多数存在する。それらは紀元前4000年から2500年にかけて建造されたもので、太古の石造建築物としてはエジプト古王国時代のピラミッドやブリテン島のストーンヘンジよりも古い時代層に属する。今回の調査では、古代ギリシア・ローマの神話・宗教テクストの生成に潜在的な影響をおよぼした地中海先住民の宗教的基層と文明的様相を把握するため、おもに両島の巨石神殿と考古学博物館を訪れて資料収集と研究データの作成を行なった。

最初に赴いた本島東部のタルシーン神殿は紀元前3000年から2500年に建設され、マルタの神殿文明の最盛期に属する。保存状態も比較的良好であり、クローバー状に半円を重ねた三つの神殿コンプレックスの独特なプランがはっきりと残る。また明らかに大地母神と推定される巨大で豊満な女神像、螺旋文様の石製祭壇、動物犠牲の痕跡などによって、建築技術と芸術の発達とともに宗教文化の成熟をうかがわせる。一方、本島南部のハジャー・イム神殿とムナイドラ神殿も最盛期の遺跡であり、とくに前者には動物犠牲の詳細を示す石台、神託・占い用の部屋、男根崇拝のシンボルなどが残っていて宗教史的考察にとって貴重である。本島ではほかに、タ・ハージュラ神殿、アール・ダラム洞窟博物館、ビザンツ教会跡、ローマ浴場遺跡、ラバトの古代ローマ遺跡と考古学博物館、首都ヴァレッタの国立考古学博物館、国立図書館などで調査した。とりわけ国立考古学博物館では、マルタで出土した多数の大地母神像ほか各種の神殿遺物が系統的に整理・分類されて精緻な解説とともに展示されており、大変参考になった。

他方ゴゾ島では、マルタ最大の巨石神殿であるジャガンティーヤ神殿（紀元前3600～3000年）が地中海最古の文明に属する建造物として屹立している。神像礼拝室と祭壇の複合的構築、生け贄洗浄のための石、蛇や螺旋文様などの装飾、大きな男根像などが、先史マルタ文明発展期の巨大なバイタリティーと高度な宗教システムの存在を圧倒的な迫力で示していると言える。ゴゾの遺跡と出土品についても、その中心都市ヴィクトリアの考古学博物館で詳細な学術的情報をえることができた。

歴史時代のマルタ島に関しては、古代ギリシア文化の痕跡はほとんどなく、フェニキア・カルタゴとローマの文明の影響が色濃く残っている（キケロの文献には当時のマルタに関する言及がある）。ところで、ホメロスの神話テクストに登場する英雄オデュッセウスが7年間留まった女神カリュプソの洞窟はじつはゴゾ島の北端にあると言われるので、今回の旅では期待して立ち寄ってみた。紺碧の地中海を真下に見おろす高い崖の上にうがたれたその洞穴は、なるほどそのような説が生じても不思議ではないじつに魅惑的な場所だった。だがホメロスの叙事詩では、あの洞窟付近の浜辺に立ってオデュッセウスが毎日7年もの間海を眺めていても、ギリシアの船は一艘も通り過ぎはしなかったという。孤島マルタはギリシア人にとって、神話的英雄オデュッセウス以外にはほとんど未知の世界に属していたのであろう。シチリア島にあれほど多くの植民都市を建設した海洋民族ギリシア人も、そのすぐ南に位置するマルタをあまりよく知らなかったのだ。この歴史的事実は、神話的なカリュプソの洞窟の存在そのものよりも不思議である。おそらく美しく魅力的なカリュプソとは、じつはマルタの先史文明社会において熱心に崇拝されたふくよかな大地母神を意味し、ギリシア人たちはその太古の女神についてのおぼろげな間接的知識をオデュッセウスの放浪物語の中に取り入れたのであろう。このように神話テクストの具体的なエピソードが内包する歴史的コンテクストに関していささかの解明の手掛りをえることができたのも、今回の調査の一つの成果であった。

スタッフ紹介

事業推進担当者

言語テクストグループ

◉天野政千代 教授　チーフ［教育推進室長］　Amano Masachiyo

シドニー大学名誉教授 M.A.K. ハリディーによって開発された体系網・機能文法理論に基づいて、言語テクストの構成原理と解釈原理について研究している。その成果を寺院、神社、絵画などの非言語テクストへ応用し、多重伝達形態理論につながる一般的なテクスト解釈原理の開発を目指している。

●釘貫 亨 教授　［教育担当サブリーダー］　Kuginuki Toru

奈良時代語の音声と文法の歴史的変遷過程を機能的な観点から解明している。最近は、古代語動詞自他対応を軸に分詞的用法の発達過程と関連させて解明している。
仮名遣いは、伝統的にひらがな文芸の綴字法とのみ考えられてきたが近世期に五十音図の導入によって古代音声学として展開したことを解明している。

●町田 健 教授　Machida Ken

文章や談話と呼ばれる、言語テクストの構造を支配する原理と、テクストがもつ内容を普遍的に表示する方法の研究を行っている。言語テクストを構成する基本的な単位は文であり、テクスト内で一次元的に配列された文の意味が、いかなる形で合成されてテクストの意味を構築するのかを解明することが研究の中心的な課題である。

歴史テクストグループ

●加納 修 准教授　Kano Osamu

西洋中世初期メロヴィング朝フランク時代の国王証書は、偽文書を除くと70点ほどしか残っていない。これらは現実に作成されたはずの国王証書の全体をどのように代表しているのか。伝来文書を、滅失文書（今日まで伝わっていないが、作成されたことが他の証拠から証明される文書）や書式と比較することによって、この問いに答えることを目指す。

GCOE 研究員

●前澤大樹　Maezawa Hiroki

主として現代英語に於いて形容詞や副詞の関わる構文、特に DP 内形容詞及び -ly 副詞による修飾構文の特性を明らかにすることを目的とする。相互補完的に生成文法と機能文法双方の理論的枠組みに基づき、文レヴェルに於ける統語構造と、談話等より大域的なレヴェルでのテクスト構造の両面からのアプローチを試み、当該領域に於ける言語現象の総体的解明を目指したい。

●重見晋也 准教授　［技術統括責任者］　Shigemi Shinya

印刷されたテクストに代わる勢いで社会に浸透しつつある電子テクストあるいはハイパーテクストの登場は、「媒体・対象・方法」というアリストテレス的なテクストの構成要素の一つが変質することで他の二つの要素にも変質をもたらすことを明らかにすることになった。本プログラムでは「テクスト布置」が、ハイパーテクストにおいてどのように変質するのか、特にテクストの空間性という観点から明らかにしたい。

●ゴーベル・ゼーン 准教授　Goebel Zane

専門は言語人類学で、これまでの研究はインドネシアにおける移民地域や行政機関、学校、一般マス・メディアにおけるアイデンティティと言語使用の交差を対象としてきた。これまでに、オーストラリアおよびインドネシアの数々の大学において、社会言語学やインドネシア語、ELF を教えてきた経験を持つ。名古屋大学では、社会言語学とフィールドワーク論、アカデミック・プレゼンテーションを担当している。

●宮地朝子 准教授　Miyachi Asako

日本語の助詞・助動詞類には“丈→ダケ”“筈→ハズ（ダ）”など名詞が文法化してその機能を獲得したものが少なくない。これらを中心とした日本語諸形式の変化と多様性について、形式個々の本質的性質と構造的位置付けに加え「テクスト布置」の観点を導入した枠組みによって分析し、動態としての日本語の構造に迫りたい。

異動のお知らせ

●2008年度より本グローバル COE プログラムの事業推進担当者として加納修准教授（西洋史学）と宮地朝子准教授（日本語学）のお二方に参加していただくことになり、早速授業も担当していただいています。プロフィールについては事業推進担当者紹介をご覧ください。

●グローバル COE 研究員の横越梓さん（英語学）が、2008年3月31日をもって退職し、2008年4月1日より名古屋工業大学大学院工学研究科に准教授として着任することが決まりました。

●横越さんの後任として前澤大樹さん（英語学）がグローバル COE 研究員として2008年4月1日より着任しました。

●ニューズレターno.5でご連絡いたしましたように、本プロジェクトの釘貫教授がエクサン・プロヴァンス大学にて博士論文審査にあたった武井由紀氏が、名古屋外国語大学に助手として採用されました。

書 籍紹介

Pierre Riché, C'était un autre millénaire. Souvenirs d'un professeur de la communale à Nanterre, *Paris, Tallandier, 2008*

わが国でもよく知られた西洋中世史家であるピエール・リシェ教授の自伝的な著作が出版された。1921年生まれのリシェ教授は、アルジェリアとル・マンでリセの教師を務めた後、チュニス大学の講師職などを経て、1967年にパリ第10大学ナンテール校の中世史講座の教授に就任し、1989年に退官した後も精力的に執筆活動を続けている。
リシェ教授がその半生を回顧しつつ語る本書は、20世紀後半フランスの学問世界、とりわけ大きな変化を経験した大学世界についての貴重な証言の記録となっている。この興味深い書物の中で、リシェ教授とグローバル COE プログラムの拠点リーダーである佐藤彰一教授との交友関係や、2006年10月に本プログラムの前身である21世紀 COE プログラム「統合テクスト科学の構築」とプロヴァンス大学との共催で行われ、リシェ教授の参加した国際研究集会「歴史・フィクション・表象」について触れられていることは、われわれに励みを与えてくれる。

外 国人招聘研究者紹介

宮川 繁（マサチュセッツ工科大学言語学科教授）
（招聘期間：2008年4月1日〜7月31日）
宮川繁氏はマサチュセッツ工科大学（MIT）言語学科の教授で、生成文法理論の研究者として世界的に知られ、Linguistic Inquiry をはじめ言語学界をリードするジャーナルに多数の論文が掲載されている。同時に MIT では映像に基づく日本史の講義も担当しており、映像テクストに深い造詣をもっている。父の仕事の関係で幼い頃よりアメリカで教育を受け、アメリカ国籍となっている。言語界では日米のよき架け橋役として知られ、MIT では日本人留学生のよき相談相手でもある。名古屋大学文学研究科グローバル COE プログラムの招聘を受け、平成20年4月1日より7月31日まで特任教授として滞在の予定である。滞在期間中は言語学と映像テクストの連続講演を担当し、大学院生の研究指導に当たると同時に、グローバル COE プログラムの今後の方向性について推進担当者と協議することになっている。

宮川先生の連続講演（使用言語：日本語）

①6月3日㈫ 16:30–18:00　●一致 I（Agreement I）
②6月18日㈬ 18:00–19:00　●画像文化（Visualizing Culture）（グローバルCOEオープンレクチャー）
③7月1日㈫ 16:30–18:00　●文の構造（Sentence Structure）
④7月8日㈫ 16:30–18:00　●一致 II（Agreement II）

①③④ 於：文学部・文学研究科1階大会議室
② 於：国際センター15F グローバル COE オフィス

グローバル COE 論文賞の募集について

文学研究科グローバル COE プログラムでは、博士後期課程に在籍する大学院生の優れた論文を「グローバル COE 論文賞」として顕彰し、プログラムの研究論集『HERSETEC』に掲載します。2007年度の募集は2月22日に締め切られ、多くの応募の中から2名の大学院生の論文が採択されました（P.3掲載）。「グローバル COE 論文賞」に応募するためには、グローバル COE 授業科目「テクスト布置解釈学原論」または「テクスト布置解釈学各論」を受講していることが必要となります。2008年度については8月と2月の2回募集する予定です。詳しくは Web に掲載するとともに、メーリングリストで発表します。

大 学院生海外派遣事業について

2007年度より始まった大学院生海外派遣事業は、博士後期課程に在籍する大学院生の研究能力の養成を図るため、海外の研究機関での研究・調査希望者を公募しています。2007年度は前号でもお伝えしたとおり、3名の大学院博士後期課程の学生が海外で研鑽を積みました。本年度は既に第1回の募集が締め切られ、次の2名の採用が決定しました。

- **玉田沙織**（日本文学）
  ［派遣先：アメリカ・University of California, Berkeley］
  「『後撰和歌集』成立期和歌の享受」
- **森田剛光**（文化人類学）［派遣先：ネパール国立トリブバン大学］
  「動的儀礼テクスト空間の形成についての映像人類学的研究アプローチ――ネパール、商業民族タカリーの祭りファーローを事例に――」

第1回の募集に加えて本年度は秋に第2回目の募集を行います。詳細を決定し次第 Web およびメーリングリストで発表します。応募資格などを再度掲載しておきますのでご確認ください。

応募資格

①平成20年度に本研究科の大学院博士後期課程に在籍し、「テクスト布置の解釈学的研究と教育」の趣旨に即した、国際的水準の研究を成し遂げる能力と意志を持つ者。
②「テクスト布置解釈学原論」または「テクスト布置解釈学各論」を受講していること。
③派遣先で使用する言語について一定の能力を有すること。
④受入れ先の機関が一定の資格や条件を求める時は、資格や条件を満たしていること。
［過去に本プログラムに採用された者の申請も可能とする。］

派遣期間と費用

①海外の派遣先における滞在期間は最長3ヶ月とする。
②必要な旅費（往復）の全額及び滞在費の一部、必要と認められた場合の備品・通信費等を支給する。滞在費の支給額については当プログラムの規定に基づいて決定するが、100万円を限度とする。
③平成21年3月25日までには必ず帰国することとする。

事 務局からのお知らせ

事務局を統括する役割を担っていただく運営コーディネータの野田ゆかりさんが3月10日付で着任しました。それに併せて文学部棟115室をグローバル COE 事務室として整備し、野田さんに常駐していただいています。また、事務補佐員としてグローバル COE 発足当時からお世話になった井上結美子さんに代わって、2008年5月1日付で安井詩歩さんが着任しました。勤務場所は文学部棟131室です。これで、運営コーディネータをトップに2名の事務補佐員という体制が整いました。質問などがありましたら、野田さんか安井さんへ気軽に聞いてください。
また、2008年4月9日にグローバル COE 大学院生ガイダンスを開催すると同時に、グローバル COE 論文賞の授賞式を執り行いました。参加していただいた皆さん、ありがとうございました。グローバル COE の事業についての大学院生向け説明会は、今後も必要な時に開催します。詳細が決まりましたら、Web とメーリングリストで案内を出します。グローバル COE プログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」では博士後期課程に在籍する大学院生を対象としたさまざまな取り組みを行っています。これらの取り組みについては、Web やメーリングリストで案内しています。
メーリングリストへの参加を希望する方は、メールを受け取りたいメール・アドレスから次のメール・アドレスに空メールを送ってください。
携帯電話のメール・アドレスでも登録可能です。

gcoe_infos@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp

SITES II HERSETEC
国立大学法人 名古屋大学 グローバルCOEプログラム
テクスト布置の解釈学的研究と教育 No.2
発行日 2008年6月1日
発 行 名古屋大学大学院文学研究科

名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOE事務室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TEL/FAX 052-747-6450
名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOEオフィス
〒450-0001 名古屋市中村区那古野一丁目47番1号 名古屋国際センタービル15F
TEL 052-587-1710 FAX 052-587-1709
web ● www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp e-mail ● bureau@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp